The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大人の中にある「子ども性」の要素とその意義の検討 : Jung派の文献を中心に
Author(s)	三浦, 史進; 原口, 喜充; 小川, 将司 他
Citation	大阪大学教育学年報. 2017, 22, p. 43-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60444
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大人の中にある「子ども性」の要素とその意義の検討
―Jung派の文献を中心に―

三浦史進　原口喜充　小川将司　平野仁弥

＜要旨＞

大人の中にある「子ども性」と呼べるような性質は、様々な観点から心理臨床において重要であると考えられるが、未だ具体的な形でまとめられていない。本稿は、大人の中にある「子ども性」について、Jung派の文献を中心に先行研究を分析し、「子ども性」の要素を抽出することで検討したものである。目的は、第一に、大人の中にある「子ども性」の要素を抽出しまとめることである。第二に、「子ども性」を大人が生きることの、大人自身にとっての意義について明らかにすることである。

KJ法を参考にした分析の結果、「子ども性」の要素として、「素」、「今」、「スピリチュアリティ」、「プレイフルネス」の４つの要素が抽出された。そして、先行研究をこのような「子ども性」の観点から検討した結果、これらの要素は、大人の中にある「子ども性」と捉えられると考えられた。また、大人自身が「子ども性」を生きることの意義も示唆された。

最後に、本稿で見出された要素を用いた「子ども性」の検討を続けることと、要素からのみならず、全体としての「子ども性」を検討し直すことの重要性を述べた。

1. 問題と目的

本邦には「童心に返る」という慣用句がある。大人が幼い子どものような心持となることを示す言葉である。この慣用句が示す状態は、子ども返りや退行のようなものではなく、ノスタルジックであたたかみのあるようなものであると一般に了解される。

近年本邦では、子どもと関わる場面において大人が童心に返ること、あるいは何かしら子どものようであることの意義を示唆する研究が見られた。矢本・清水・馬見塚・平野・原口・小川（2015）は、父親のための子育て支援を目的とした活動において、父親が子どもと関わるイベントにおいては、父親たち自身が子ども時代の遊びや活動を共有し、集団遊びを楽しむというようなテーマが好まれることを見出した。平野・原口・小川・矢本・清水・馬見塚（2015）は、その活動にボランティアとして参加した学生たちに、そのような父親のあり方が好ましいものとして捉えられ、学生たちにおけるより具体的で動的な父親イメージの再構築に繋がっていたとしている。また、原口（2016）は、保育者に対するインタビュー調査の結果から、保育活動の中で園児と共に保育者自身も楽しいと感じ、子どもと“楽しいが一致”して保育を進めていけることの重要性を指摘した。

子どもと関わる大人が童心に返るということに関連するであろう、心理臨床における知見に、Jung派の分析家であるGuggenbühl-Craig（訳書 1981）の「物をよく知っている大人―物を知らない子ども[1)]」元型がある。それによれば、大人の中の子どもらしさが抑圧され子どもに投影されると、大人はただ「大人」を生きるだけとなってしまい、様々な問題を生じることがあるという。Guggenbühl-Craig（訳書 1981）は、「大

人―子ども」元型を分裂させず、その両極を生きる必要性を指摘し、元型の一方の極が抑圧されると「無意識の中で作用するが、その結果精神的な障害が起きてくることがある」と述べている。また、「大人―子ども」元型の両極を「大人性」と「子ども性」と言い換えている。ここまでに挙げた知見と合わせて考えると、大人が童心に返ることは、大人が「子ども性」を発揮し、それを生きていることの現れと考えられるだろう。

また、交流分析を基にしたエゴグラム（杉田 2004）の考え方においても、「子ども性」というような観点は見出せる。橋本・太田・廣田・上村・森川・岸本（2007）によれば、精神科での新患を対象に東大式エゴグラムを用いた調査で、全体としてAC（順応した子ども）優位、FC（自由な子ども）低位が多い傾向が見られた。三野・金光（2007）では、M型や逆N型といった、高FC得点を含むタイプのエゴグラムにおいて精神的健康度が高いことが報告されている。また、任・豊田・中井・菅（1997）は、看護学生におけるFCの自我状態はケアにおける創造性に通じるとし、その意義を示唆している。これらのことからは、ここまでの議論と同様に、大人がある種の「子ども性」を欠くことで問題を生じ、逆に「子ども性」を生かすことが有意義であることが示唆されると言えよう。

さらに、Rogers（訳書 2001a）によるパーソナリティの発達についての仮説においても、「子ども性」の意義は示唆されると考えられる。Rogers（訳書 2001a）は、人は幼児の段階においては基本的に実現傾向に即した有機的なゲシュタルトであるとされ、即ち自己一致していると考えられるが、その発達に従い不一致が生じてくるとしている。つまり、人は幼い頃は原則として精神的に健康であるが、大人になるに従ってその限りではなくなるとされる。

このように、子どもの持つ、あるいは子どものような性質、「子ども性」は、様々な視点から、心理臨床において有意義であることが示唆されていると考えられる。しかし、これらの視点には相異や不十分な点も見られる。まず、エゴグラムの基礎となる交流分析の理論では、個人の自我状態が主要な着眼点となり、特に対人関係における具体的なやりとりが重視される（杉田 2004）。これは、心的性質としての「子ども性」というよりも、実際に子どものように振る舞うことの方に着目していると言え、言動に現れる訳ではないが心の内では動いている「子ども性」を見落としかねない点で不十分である。また、Rogers（訳書 2001a）においては、不一致が生じた後再び自己一致へ向かう過程では、「子ども性」と言えるような性質には言及されない。さらにRogers（訳書 2001a）においては、自己実現や自己一致に向かう傾向は人間が本来持つものであり、子どもはそれを阻害されていないというように見なされるが、後のRogers（訳書 2001b）自身が、デモンストレーション面接において女性クライエントの内なる「少女」に言及している。この点でもやはり「子ども性」の意義は示唆されるが、「子ども性」としての言及はなされておらず、そのような視点での具体化はなされていない。即ち、これらの観点においては、冒頭で挙げたような知見における大人の中の「子ども性」について、十分に明らかにされていないと言える。

これらと比較して、Guggenbühl-Craig（訳書 1981）では、Jung派心理学の立場から、より内的なものも含み、かつ、比較的詳細に、「子ども性」に言及していると言える。しかしながら、その記述は具体的というには足りず、「子ども性」を生きるということが、どのようなことであるかやはり十分には了解しきれない。

そこで本研究では、以下、「子ども性」についてより具体的な理解を得るため、Guggenbühl-Craig（訳書 1981）の示唆を出発点とし、Jung派心理学の文献を中心に先行研究を検討する。

まず、Jung派心理学の原点である、Jungとその元型論から「子ども性」を考える。本邦ではJungは河合隼雄によって広く紹介されたが、河合（1967）によれば元型とは、Jungが、集合的無意識の内容の表現の中に見出せる、人間に共通した基本的な型を指して用いた概念である。Jungはその観点から「子ども元型」について言及しており（Jung 訳書 1999）、従って元型論の立場からは、大人も含め、人間は普遍的に子ど

ものような型の心性を持ちうるのだと考えられる。

Jung派の考え方に関連して、トランスパーソナル発達心理学の視点から、Armstrong（訳書 1996）もまた、子どもの持つ特性の意義に言及している。Armstrong（訳書 1996）は、子どもは単に未熟な人間なのではなく、高い次元から降りてきたような存在でもあり、癒し手としての側面も持つなどとしている。これらの視点は、子ども自身が持つものとして捉えられる「子ども性」の、意義深い側面に言及していると言えるだろう。またそこでは、Ashley-Montaguのネオテニーの概念から、このような子どもの資質が大人の社会に取り入れられなくてはならないことが述べられ、他にも、純真な子どもの状態に立ち返ることで、大人の中で堰き止められていたエネルギーが解放される、ともされている。このようにして、Armstrong（訳書 1996）は大人における子ども性の持つ意義についても述べている。

また近年でも、Jung派の分析家である老松（2014）が、人の心性の系統として「人格系」と「発達系」という視座を提唱し、その意義を述べている。老松（2014）によれば、「人格系」とは、それが極端なもの、病的なものになれば、今日では人格障害的だと言われるような人の心性であり、「発達系」とは、それが極端なもの、病的なものになれば、今日では発達障害的だと言われるような人の心性である。そしてそこでは、個人内、個人間で対立して種々の困難を生むこれらの性質を意識し折衝していくことで、和解を目指すことの重要性が説かれた。その中で、老松（2014）は特に発達系的性質に着目しているが、それを述べるための概念の一つに安永（1980）の「中心気質」を挙げている。中心気質とは、Kretschmerの気質―体格類型論に準じて、類てんかん気質を含む気質として安永（1980）が用いた概念である。安永（1980）は、中心気質を大まかに理解するためには、5～8歳位ののびのびと発育した子どものイメージを思い浮かべればよいと述べ、またこの気質はどんな人の心にも、その基底に含まれているものであるとした。

これらのJung派的な視点からは、改めて、大人の中にもある「子ども性」と言えるようなものの意義が示唆されてきたことが分かる。しかしながら、これらがはっきりとした形でまとめられていないことは、Guggenbühl-Craig（訳書 1981）と同様である。具体的には、大人の中にある「子ども性」を理解しようとした際に、それがどのような「子ども性」から了解できるのか、あるいは「子ども性」のどのような要素がそこで働いているのか、といった視点で直ちに参照できるような形ではまとまっていないと言える。

そこで、改めて、以下を本研究の目的とする。まず、「子ども性」として参照しやすい形でまとまりのある知見を得るために、ここまでに挙げたGuggenbühl-Craig（訳書 1981）、Jung（訳書 1999）、Armstrong（訳書 1996）、老松（2014）、安永（1980）に見られる「子ども性」に通じると考えられる記述を整理し、共通部分をまとめることで、「子ども性」の一般的な要素を抽出することを試みる。次に、抽出された要素について、それが大人自身にとってどのような意義を持つかなどの観点から考察する。

2. 方法

本研究では、「子ども性」の一般的な要素を抽出するために、先行文献における大人の中にもある「子ども性」に関する語句・文章を抽出し、KJ法（川喜田 1967, 1970）を参考に分析して、「子ども性」の要素を明らかにし、それぞれの命名を行った。分析対象とした文献は先の項で取り上げた、Guggenbühl-Craig（訳書 1981）、Jung（訳書 1999）、Armstrong（訳書 1996）、老松（2014）、安永（1980）の5編である（表1）。

分析方法：

(1) 記述の抽出

分析対象とした文献中から「子ども性」の特徴に関すると考えられる記述を抽出した。記述の抽出に先

立ち、研究者間で文献を読み込み議論した上で、「子ども性」に関する共通認識を持てるようにした。それぞれの文献について、４名の分析者（臨床心理士２名・臨床心理学専攻の大学院生２名）で分担して抽出を行った。その結果、243個の記述が抽出された。

(2) 記述の分類

KJ法を参考に類似している記述ごとに分類し、命名した。その際、分析者間で改めて「子ども性」に関する記述ではないと同意した場合には、分類から除外することとした。実際の分類においては、「子ども性」ではなく「子ども性の発露の具体例」であると考えられたもの（安永（1980）における、中心気質的な偉人の例など）や、「子ども性」というよりはセルフを示すものとしての、Jung（訳書 1999）における子ども元型についての記述などが除外された。

その後、得られた下位概念同士の関係を検討し、関連の深い概念ごとに分類し、カテゴリーとしてまとめた。分析はKJ法やその他の質的研究法の経験のある分析者４名（臨床心理士２名・臨床心理学専攻の大学院生２名）全員が集まって、意見を出し合いながら進めた。

(3) 命名　　分析結果を元に各カテゴリー名を定めた。

表１　「子ども性」に関する先行研究と抽出した該当箇所等

著者	文献	該当箇所	抽出語句数
Jung （訳書 1999）	“Zur Psychologie des Kindarchetypus.” （「童子元型」）	『元型論』，pp.71-209	101
Guggenbühl-Craig （訳書 1981）	“Macht als Gefahr beim Helfer.” （『心理療法の光と影』）	pp.132-141	15
Armstorong （訳書 1996）	“The Radiant Child” （『光を放つ子どもたち―トランスパーソナル発達心理学入門』）	pp.129-132	19
老松（2014）	第二章　発達系に対する血の通った理解	『人格系と発達系』，pp.44-71	31
安永（1980）	「中心気質」という概念について	『てんかんの人間学』，pp.21-57	77

3. 結果と考察

分析の結果、抽出された語句は、４個のカテゴリーと、17個のサブカテゴリーに分類された（表２）。以下、それぞれのカテゴリーとサブカテゴリーについて記述する。以下、カテゴリーを「」、サブカテゴリーを＜＞で示す。

3－1. カテゴリー「素」

このカテゴリーは、子どもの＜天真爛漫＞さ、＜自然体＞な素直さ、あるがままのあり方や、気まぐれで奔放な＜自由さ＞、無垢な＜無邪気さ＞、わがままな＜自己中心性＞、どこでも＜見捨てられている＞ような傷つき、あるいは傷つきやすさ、非現実的な＜不合理さ＞、ものをよく知らない＜無能さ＞、という８つのサブカテゴリーから構成された。これらの構成要素は、子どもにおける、子どもそのままの素の部分の性質を表していると考えられたため、このカテゴリーは「素」と命名された。

3－2. カテゴリー「今」

このカテゴリーは、今という瞬間において全てを投入して何かに熱中する＜現在への集中＞と、同様に今という瞬間に何かに衝動的に駆られるような＜衝動性＞、という２個のサブカテゴリーから構成された。こ

れらの構成要素は、子どもの、「今」という瞬間にかかわりの深い性質を表していると考えられたため、このカテゴリーは「今」と命名された。

3－3. カテゴリー「スピリチュアリティ」

このカテゴリーは、超越的なものに開かれているような＜スピリチュアリティ＞と、自然の動物に近いようなあり方であるという＜ワイルドネス＞、自他や根源的なものと分化していない＜未分化さ＞、という3個のサブカテゴリーから構成された。これらの構成要素は、＜スピリチュアリティ＞を中心として、子どもの超越的なものと根源的なもの双方への親和性を表していると考えられたため、このカテゴリーは「スピリチュアリティ」と命名された。

3－4. カテゴリー「プレイフルネス」

このカテゴリーは、遊びや新鮮なことを求める＜遊び心＞、新しいものを生み出す＜創造性＞、だらしなさや戯れに何かを壊すようなあり方による＜破滅的＞な性質、弱い刺激では不満足で刺激を求める状態にあるという＜刺激飢餓＞、の4個のサブカテゴリーから構成された。これらの構成要素は、子どもの遊びは創造的でも破壊的でもある、というような性質と、子どもがそのような遊びを求める性質を表していると考えられたため、このカテゴリーは「プレイフルネス」と命名された。

3－5. 分類の結果についての考察

分析の結果、子ども性に関連すると考えられる記述の内容が「素」、「今」、「スピリチュアリティ」、「プレイフルネス」の4個のカテゴリーに分類された。従って、子ども性は、これら4つの一般的な要素に大別して捉えることができると考えられることが示されたと言えよう。以下、これらの分類結果について考察していく。

これらのカテゴリーの中で、「素」に最も多いサブカテゴリーがまとめられたことからは、この要素が、子ども性の中でも主要なものであることが示唆されるように思われる。＜天真爛漫＞、＜自然体＞で＜自由さ＞や＜無邪気さ＞を持つことは、子どもの性質を思い浮かべたとき、確かに主要な要素でありうるだろう。特にこのような性質は、子どもの肯定的な側面の一部を示すように思われる。また一方で、＜自己中心性＞、＜不合理さ＞、＜無能さ＞は、どちらかというと子どもの否定的に捉えられがちな側面を示すように思われる。未だ発達しておらず無能であり、自己中心的で不合理な姿もまた、子どもの性質として主要なものと考えることができよう。そして、そのような否定的な側面を持ちながら、無邪気にあるがままである子どもには、大人のような守りが無いというように考えることもできるだろう。このような点が、子どもが常にどこか＜見捨てられている＞ような傷つきや、傷つきやすさを導くとも考えられる。

他の3個のカテゴリーには、それぞれ2～4のサブカテゴリーがまとめられた。＜現在への集中＞と＜衝動性＞からなる「今」は、子どもの、今というその瞬間における全力の熱中や果断さと、過去から未来へという連続性の無い今という瞬間の移ろいやすさの両面を表すものであると考えられる。この要素からは、夢中で何かに取り組むこともあるが、突然飽きることもあり、かと思えば新しいことを始めるような、熱しやすく冷めやすい子どもの姿がイメージされよう。

「スピリチュアリティ」には、＜スピリチュアリティ＞、＜ワイルドネス＞、＜未分化さ＞が分類され、超越的なものや、自然的なもの、根源的なものに親和性が高い、という子どもの性質を示すと考えられた。子どもがこのような性質を持つことは、古くから今日に至るまで、様々な物語やファンタジーにおいて子どもが主人公となり、動物や植物と交流したり、偉大なものや神的なもの、あるいは根源的なものと出会い触

表2　抽出されたカテゴリーの一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
素	天真爛漫	・天真爛漫（安永） ・童子の無敵さ（Jung）
	自然体	・外から何か刺激を受けると、それによって内心に生じたことを、隠そうともせず、ただ素直に素朴に外に向けてさらけ出す（老松） ・リラックスして自然の成り行きに身を任せる（Armstrong）
	自由さ	・奔放に通念をはみ出す予測し難さ（安永） ・無責任（Armstrong）
	無邪気さ	・邪心の無さ（老松） ・愛すべき無邪気さ（安永）
	自己中心性	・わがまま（Armstrong） ・幼稚さ（Guggenbühl-Craig）
	見捨てられている	・どこにいても罪にまみれて追放されてしまう居場所のなさ（老松） ・ほとんど無意識な恐怖が「黒い火」（ヤコブ・ベーメ）のように背後にゆらめき、彼の存在を脅かしている（安永）
	不合理さ	・非現実性（Armstrong） ・不合理な試み（Guggenbühl-Craig）
	無能さ	・無能（Jung） ・世事に疎い（Guggenbühl-Craig）
今	現在への集中	・今現在に、熱狂と興奮、絶頂と恍惚、究極と永遠がある（老松） ・執着（Armstrong）
	衝動性	・衝動的、発作的な怒りや悪に駆られたり（老松） ・果断（安永）
スピリチュアリティ	スピリチュアリティ	・神的である（Jung） ・開かれた状態（Armstrong）
	ワイルドネス	・意識の限られた枠を超えた生命力（Jung） ・自然の動物に近いあり方（老松）
	未分化さ	・外物の美は即、心（意識）の美、外物の醜は即、心の醜として距離感なく一体に動く（安永） ・（童子元型は）根源からの分離の必要性を意識に教えるシンボル（Jung）
プレイフルネス	遊び心	・ユーモアのセンス、遊び心（Armstrong） ・新しいことや新鮮なことを求める心（Guggenbühl-Craig）
	創造性	・創造性（Armstrong） ・絶えず新しいことに導いていってくれる（Guggenbühl-Craig）
	破滅的	・ほとんど性格破綻者、とも思われるようなだらしなさ（安永） ・無意識はただ戯れに生み出すにすぎず、破壊もまた戯れとならざるをえない（Jung）
	刺激飢餓	・弱い微細な刺激では不満足（安永） ・慢性の刺激飢餓の状態にいる可能性が大きい（安永）

れ合ったりするという筋がいたるところに散見されることから素朴に了解できよう。今日的な観点から言えば、宮崎駿（2001）の『千と千尋の神隠し』が世界的に人気を博したことからも、そのような筋が人間に普遍的に訴求力を持つことが伺える。あるいは、日常的な場面においても、子どもが自然と親しむ姿や、大人を強く感動させるような振る舞い、言動をするようなイメージは、普遍的に持たれているものと考えられる。

「プレイフルネス」は、＜遊び心＞、＜創造性＞、＜破滅的＞、＜刺激飢餓＞というサブカテゴリーからなった。子どもが遊びや刺激を求めることはごく自然なこととして了解できよう。また、その遊びが、工作のように、新しい何かを生み出すような創造性を持つこともあれば、何かに落書きしたり、投げたり蹴ったりと、破滅的、破壊的な性質を持つこともあるということも、子どもの遊びをイメージすれば、よく理解できるものと思われる。

4. 総合考察

4－1. 大人の中の「子ども性」としての理解

以下、前項で示した「子ども性」の要素が、大人にも見られるものであることについて述べる。

まず、「素」について、大人が、無邪気に自然体で、自由であることや、自己中心的で無能、不合理であることは、子どもに比べ少ないにしても、無いということは決して言えないだろう。見捨てられているような傷つきや傷つきやすさについても、それが大人にもあり、高じれば病理ともなることは、心理臨床において周知の事実であると言える。また、「今」に関連して、大人が何かに熱中することも、衝動的になることも当然あることであるし、それが時に「子どもっぽい」と言われることも、素朴に了解されるところであろう。次に、「スピリチュアリティ」という言葉が指すものは本来多様で多義的な概念でもあり、平野（2015）がまとめたように、人間に生得的に備わっていて本能的なものであるともされる。その点で、先にまとめたように子どもに見られるものもあれば、同様のものを大人に見出すこともまたあるものと言える。「プレイフルネス」についても同様であって、遊びは子どものものであると同時に、Huizinga（訳書 1973）以来、人間に普遍的なものであると考えられてきたと言える。そして、子どもの遊びであれ大人の遊びであれ、何かを創り出すこともあれば、破滅的、破壊的であることもある。大人になるほど直接的に破滅的、破壊的な遊びは少なくなるかもしれないが、一方で、賭け事やスカイダイビングのような、スリルという形でのそのような遊びは、むしろ多くなるとも考えられよう。

以上、総合すると、本研究で得られた「子ども性」の一般的な要素は、子ども的な性質として了解できるものでありながら、大人の中にあるものでもある、「子ども性」の要素として理解できると考えられる。

4－2. 大人自身が「子ども性」を生きることの意義

次に、分析対象とした文献や、矢本ら（2015）及び平野ら（2015）、原口（2016）によって示唆されてきた、大人自身が「子ども性」を生きることの意義について考察する。

本稿で得られた「素」、「今」、「スピリチュアリティ」、「プレイフルネス」という「子ども性」の要素は、様々な観点から、大人にとっても重要なものであると考えられる。冒頭で述べた知見に立ち戻ると、抽出の元となった文献においてはもちろんのこと、交流分析においてはC（子ども）の自我状態の創造力を駆使して「今の私なら、どう対応するか」と具体的な解決策を見出す（杉田 2004）とされるが、これはまさに「プレイフルネス」における＜創造性＞や「今」といった性質を活かしていると言えよう。また、Rogers（訳書 2001a）が幼い時期に自己一致の状態を見出すことも、同様の＜自由さ＞や、＜創造性＞の観点から理解することができるであろう。

また、矢本ら（2015）及び平野ら（2015）においては、子どもとの関わりや遊びに子どものように集中することが、大人である父親自身にも好まれ、それを共にした学生ボランティアたちからも好ましいものとして経験されたことが示されている。また原口（2016）からも、保育者自身が園児と共に活動することを楽しむことが、保育者自身にとっても園児にとっても有意義であることが示されている。そこには、まさに子どものような＜天真爛漫＞さや＜自由さ＞という「素」の姿や、「今」に熱中して遊びや活動に取り組む「プレイフルネス」があったと言えるだろう。これらのことから、「子ども性」の要素は、それを生きる大人自身にも、それを見て、また共にする者にとっても何か好ましいものとして体験されることが示唆される。

そして、平野（2015）がまとめているように、「スピリチュアリティ」とは人間に普遍のものであって、多様な意義と価値を持ちながら研究が続けられているものである。その具体的な意義を述べることはそれら

の研究に譲るとしても、スピリチュアリティと呼べるものに何らかの意義があることは明らかであると言ってよいだろう。

5. まとめと今後の展望

以上、本稿では、大人自身が「子ども性」を生きることの意義に注目し、大人の中にある「子ども性」の一般的な要素を「素」、「今」、「スピリチュアリティ」、「プレイフルネス」として先行研究から抽出してまとめ、考察した。

これらの要素が大人自身にとって有意義であることは、本稿において示唆されたものと考えられる。今後は、その示唆をより確実かつ実践的なものとするために、先行研究との比較検討においてのみならず、これらの要素の検討を目的としてデザインされた新たな研究も含め、様々な実践においてこのような要素が役立つかどうかの検討を積み重ねることが課題である。

また、本稿では「子ども性」の一般的な要素を抽出、分類しまとめることに重点が置かれたが、先行研究では、それらの要素が独立したものとしてよりはむしろはっきりと分類してはまとめられないような全体として示されてきた。即ち、「子ども性」の全体は、あくまでそのような独立した要素の分類によってのみ把握可能なものではなく、それぞれの要素が関係しあい、絡み合いながら、そのようなものとして捉えられてきたものであると考えられる。従って、そのような視点から、本稿で得られた要素を生かしつつ、全体としての「子ども性」がどのように捉えられるかを改めて検討することもまた、今後「子ども性」を様々な実践で役立てる上で重要になるだろう。

注

1）Guggenbühl-Craig（訳書 1981）では「子供」と漢字で表記されているが、近年一般的に「子ども」表記が多くみられるため、本稿では後者に統一した。

引用文献

Armstrong,T. 1985 The Radiant Child.　中川吉晴訳 『光を放つ子どもたち―トランスパーソナル発達心理学入門―』日本文教社　1996.

Guggenbühl-Craig,A. 1978 Macht als Gefahr beim Helfer.　樋口和彦・安溪真一訳 『心理療法の光と影』創元社 1981.

原口喜充　2016 「日々の保育における担任保育者の保育体験―保育者の主観的体験に注目して―」『保育学研究』54 (1), 42-53頁.

橋本和典・太田豊作・廣田直也・上村秀樹・森川将行・岸本年史　2007 「東大阪市立総合病院精神科における新患調査:エゴグラムと診断との関連を中心に」『Journal of Nara Medical Association 』58, (2) – (3), 75-81頁.

平野仁弥　2015 「ユングの宗教性から捉えたスピリチュアリティ」『大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要』21, 56-64頁.

平野仁弥・原口喜充・小川将司・矢本洋子・清水里美・馬見塚珠生　2015 「父親への子育て支援プロジェクトの構想と展開 (2)」『日本心理臨床学会第34回秋季大会発表論文集』459頁.

Huizinga,J. 1939 Homo Ludens: A study of the play element in culture.　高橋英夫訳 『ホモ・ルーデンス』中公文庫　1973.

Jung,C.G. 1940 “Zur Psychologie des Kindarchetypus.”, Die Archetypen und das kollektive Unbewußte,　林道義訳 『元型論』紀伊国屋書店　1999, 71-209頁.

河合隼雄　1967 『ユング心理学入門』培風館.

川喜田二郎　1967 『発想法―創造性開発のために』中央公論社.

川喜田二郎　1970 『続・発想法―KJ法の展開と応用』中央公論社.
木下康仁　2003 『修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践【質的研究への誘い】』弘文堂.
木下康仁　2007 『ライブ講義M-GTA　実践的質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.
三野節子・金光義弘　2007 「アサーションの型とエゴグラム性格特性との関連：大学生のいきいき度を指標として」『日本教育心理学会総会発表論文集』49，33頁.
宮崎　駿　2001 『千と千尋の神隠し』スタジオジブリ.
任　和子・豊田久美子・中井義勝・菅佐和子　1997 「エゴグラムからみた看護学生の自我状態の変化」『京都大学医療技術短期大学部紀要　別冊　健康人間学』 9，73-78頁.
老松克博　2014 『人格系と発達系―〈対話〉の深層心理学―』講談社.
Rogers,C.R. 1959 “A Theory of Therapy, Personality, and Interpersonal Relationships, As Developed in the Client-Centered Framework” Psychology: A Study Of A Science Volume.3. Formulations Of The Person And The Social Context. 184-256. Kirschenbaum,H. & Henderson,V.L.(Ed.) 伊東　博・村山正治監訳 『ロジャーズ選集（上）』誠信書房　2001a，286-313頁.
Rogers,C.R. 1986 “A Client-centered/Person-centered Approach to Therapy” Psychotherapist’s Casebook. 197-208. Kirschenbaum,H. & Henderson,V.L.(Ed.) 伊東　博・村山正治監訳 『ロジャーズ選集（上）』誠信書房 2001b，162-185頁.
杉田峰康　2004 「[28] 交流分析」氏原　寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編 『心理臨床大辞典改訂版』培風館　380-384頁.
矢本洋子・清水里美・馬見塚珠生・平野仁弥・原口喜充・小川将司　2015 「父親への子育て支援プロジェクトの構想と展開（1）」『日本心理臨床学会第34回秋季大会発表論文集』458頁.
安永　浩　1980 「「中心気質」という概念について」木村敏編 『てんかんの人間学』東京大学出版会　21-57頁.

Elements of "Childness" in adults and significance thereof: focusing on Jungian studies

MIURA Shishin, HARAGUCHI Hisami, OGAWA Masashi, HIRANO Kimiya

Abstract

Sometimes people use an idiom like "return to the child's mind." According to some, "Childness" in adults is important in psychotherapy, although this view has not yet been clarified. In view of this, the present paper clarifies and discusses the elements of "Childness" in adults through analysis of Jungian and other studies. The purposes of this study were, first, to identify and clarify the elements of "Childness" in adults, a concept whose importance has not yet been confirmed. Second, the study sought to clarify the significance of activating elements of "Childness" in adults, for their own benefit.

Based on our analysis of Jungian studies and others referring to the KJ method, we identified four elements of "Childness," namely, "naturality," "nowness," "spirituality," and "playfulness." A comparison of previous studies suggested that these elements can be found not only in children, but also in adults. We also concluded that it was important for adults to activate the elements, to attain liveliness.

In addition, we pointed out the importance of investigating "Childness" in view of the elements. However, investigation of "Childness" based on the elements is not enough. Moreover, it is important to review "Childness" as a whole, for thorough elucidation.